

『萬寶全書』 諸夷門小論

—— 明人の外國觀 ——

三 浦 國 雄

1、小序

筆者は、數年前から『萬寶全書』に關心を抱いて少しずつ調査を進めてきている。『萬寶全書』の研究は、社會史よりする仁井田陞氏、「日用類書」という大きなカテゴリーを設定して研究の基礎固めを行なった酒井忠夫氏以來、しばらく途絶えていたが、近年ふたたび活況を呈しつつある。時あたかも、汲古書院から刊行中であつた「中國日用類書集成」全十四卷が完結した（二〇〇四年十月）。本叢書は明版六種を選んで影印したもので、學人に基礎資料を提供したその意義は大きい。編者の酒井忠夫・坂出祥伸・小川陽一の三氏は、いずれも日用類書の研究を推進してこられた方々であり、御三方による解説・解題は、『萬寶全書』の内容のみならず、書誌、研究史、研究の意義に説き及んでいきわめて有益で、今後の研究の飛躍的發展が期待される。

他にも、南宋・陳元靚『事林廣記』の書誌的研究をリードしてきた森田憲司氏の一連の業績は注目値する。『萬寶全書』の源流というべきこの『事林廣記』については、金文京氏の主宰で現在、京都大學人文科學研究所において部分的な譯注造りが進行中である。『萬寶全書』はその多彩な圖像によって讀者層を擴大していったのであるが、その圖像研究を進めているのが尾崎勤氏である。

こうした活性化しつつある研究状況の中において、斷然異彩を放っているのが臺灣の新星、吳蕙芳女史である。女史の研究の眼目は、『萬寶全書』を使った明・清人の日常の暮らしの再現にあるが、七百頁を越えるその名も『萬寶全書』：明清時期的民間生活實錄^①』という著書は、日用類書に關する最初の專著であり、本書によって初めて『萬寶全書』の全體像が明らかにされたと言っても過言ではない。卷末の付録「明清時期各版『萬寶全書』目錄」は、女史が各種の目錄から抜き出した六十八種に及ぶ『萬寶全書』について、その版本、所在、卷數、目次等を刊行年順に書き記したもので、ここには現存する『萬寶全書』が全て網羅されている、とまでは言えないものの（筆者の感觸ではほぼ八、九割方は收められていると思う）、明・清時代に刊行された多様な『萬寶全書』がこの便利ナリストによって一目瞭然になった（本邦が群を抜いて多數所蔵している事実もこの目錄から判明する）。『萬寶全書』を引用する場合、この吳女史目錄*

*番と明示するのが慣例化しつつあるので、小論でもそれに倣うことにする。なお、二〇〇三年九月、大阪において、吳女史もまじえた『萬寶全書』に關するシンポジウムが開催されたことを付記しておきたい。^②

ところで、筆者の研究の方向であるが、年季が入っていないこともあって實のところ「研究」と言うに足る實績はほとんどない。筆者の場合は、もともと擇日書や通書（『玉匣記』も含む）、それに風水、易占といった術數に對する關心からの接近であった。中國近世において、通書、『玉匣記』、曆書、日用類書などの垣根は低く、互いに知識・情報を奪い合い融通し合う、いわば通書的空間なるものが形成されていた。^③ そういうわけで、通書や術數を扱う以上、『萬寶全書』にも踏み込まざるを得なくなってきたのである。筆者の關心は地域的には沖繩にも向けられていたので、結局のところ『萬寶全書』に關する最初の論考は「沖繩に傳來した『萬寶全書』^④」というものになった。その論文ではまず、中國における『萬寶全書』の成立と内容を整理したのち、沖繩に伝えられた『萬寶全書』がかなり特殊な版本で、社會の識字層の最下層の人々をターゲットにしたものではないか、という見解を提起した。従って、本來の關心事であった

『萬寶全書』に見える通書や術數というテーマについては、まだ論じるに至っていない。

では本稿でその問題を論じるのかというと、タイトルを見れば分かるように實はそうではない。『萬寶全書』という書物は、その名が示しているように多様なジャンルに跨る知識・情報を網羅している。この一冊を常備しておけば日常生活が圓滑に営める、というのが謳い文句なのである。十卷本というコンパクトなものもあるが、⁵明刊本は三十數卷とというのが多く、最も浩瀚なのが四十三卷である。⁶一巻が一部門に對應するというのが本書の新しい紙面構成であったから、四十三卷本なら天文、地理、人紀等々、四十三種もの異なった部門が備わっていることになる。各地の所藏機關に赴いてさまざまな版本を親見するにつれ、筆者の關心は通書・術數のみならず、本書の書誌上の問題や多様な中身、ないしは多様性そのものにも向かっていった。

とは言っても、『萬寶全書』というこの多彩な内容を持ち、ある意味では複雑な書物をどのように論じればよいのか、實のところ筆者は未だ戸惑いの裡にある。小川陽一氏のように、近世小説という観点から分析するというのも一つの方法である。筆者は今のところ、自分としては各部門ごとのいわば個別研究を積み上げてゆくしかないと考えている。本稿はそうした立場からする一つの試論である。「諸夷門」を取り上げたのは、筆者が一方で中國人の華夷觀念に對して思想的關心を抱いてきたからである。

2、諸夷門の粉本

明清のほとんど全ての『萬寶全書』には「諸夷門」という部門が設けられている。現存する『萬寶全書』の中で最も古い刊本は萬曆二四年（一五九六）刊『萬書萃寶』⁷で、現時點ではそれより早い版本は確認されていないが、すでにそ



圖1 『妙錦萬寶全書』諸夷門（汲古書院集成本第12卷）

の巻五に諸夷門が立てられている。門名は他に「外夷」「西夷」となっている場合もあるが、明から清をへて民國に至るまで、およそ『萬寶全書』である限り、十巻本であれ沖繩傳來本であれほとんど例外なしに立てられている。

次に諸夷門の内容であるが、これも大部分の『萬寶全書』は共通の固定的な構成になっている。上段にはおおむね「山海異物」という表題が記され、「神類」「獸類」「禽類」「魚蟲類」に分けられて、それらの個々の「異物」に圖像と説明文が付せられている。ほぼ紙面の三分の二を占める下段は、巻頭に「羸蟲錄序」が置かれ、次に「羸蟲錄」という表題があって、以下一國毎に外國人像が掲げられその國の説明が施されている。「羸蟲錄」の本文の轉載というわけである。「羸蟲錄」という表記はなくて、その代わりに「諸夷雜誌」と記載されているものや（『文林聚寶』、『五車拔錦』など）、「羸蟲錄」の下に「外夷雜誌」と記されている版本（圖1『妙錦萬寶全書』など）、それに「外夷雜

誌『羸蟲錄』などと両者が一つになったもの（『學海群玉』など）もある。このように細かな相違はあるものの、いずれも大同小異であって、上段に神怪な神と珍獸、下段に外國誌というのが共通した内容である。

次なる課題は諸夷門の粉本探しである。『萬寶全書』という書物はある時點で誰か特定の人物が書き下ろしたのではなく、すでに出來上がっている多くの書物をもとに、いわば糊と鋏で拵え上げたパッチワークのような本なのである。そこでまず、ソース探しという基礎作業から始めざるを得ないのであるが、上段の神怪・動物誌については研究が進んでいる。先述の尾崎勤『怪奇鳥獸圖卷』と中國日用類書^⑩がそれで、尾崎氏は、陳元靚『事林廣記』の諸本、胡文煥『新刻山海經圖』（萬曆二十一年序刊、『中國古代版畫叢刊』第一輯）、『文林廣記』（萬曆三十五年刊、宮内廳書陵部藏）といった書物を有力な候補として擧げている。明代に圖が再現され、神獸の種類が増廣されたにせよ、これらのソースのソースが戰國時代の空想的地理誌『山海經』だという事實は動かない。「山海異物」という名稱にもそれは現れているし、もっと端的に「山海經異像」という表題を掲げている版本もある（『三臺萬用正宗』など）。

本稿の主題はむしろ下段にある。下段の外國誌は、はっきり『羸蟲錄』という書名を明示しているから出處探しは何の問題もないように見える。ところが、この『羸蟲錄』という本が一筋縄ではゆかない曲者なのである。『羸蟲錄』は、從來わが國の學界ではほとんど取り上げられることのなかった書物のひとつである。管見の及ぶ限り、本書に對して最初に注意を喚起したのは王重民氏であるが、本邦では「使琉球錄」の個人全譯を刊行中の原田禹雄^{のぶお}氏であった。『羸蟲錄』は冊封使が琉球に渡る際、琉球事情を知る上で重要な参考文献のひとつとしてリストアップされていたが、原田氏はその『中山傳信錄』の譯注において、『四庫提要』史部地理類存目の「異域志」の提要中に『羸蟲錄』という書名が見えることを指摘された^⑪。『羸蟲錄』と『四庫提要』に言う『異域志』と現存する周履靖の『異域志』（夷門廣牘所收）との三者の關係には微妙なところがあり、完全には一致しないようで、本書の素姓や成立事情については不明なところ

がなお多く残されている。それはともかく、『羸蟲錄』という書物は現存する。明の胡文煥の『格致叢書』に收められているのである。

ただ、この叢書もいわくのある編纂物で、現存するすべての『格致叢書』に本書が入っているとは限らず、現存の格致叢書にはむしろ本書を収めていないものが多いようである。⁽¹²⁾ところが幸いなことに、最近北京で本書の首都圖書館藏本の影印版が帙入りの美麗な線装本として刊行されたので、容易に手に取って見ることができるようになった。⁽¹³⁾『使琉球錄』所引の『羸蟲錄』の問題はこれではほぼ解決する。前者の引用と後者の文章とが一致するからである。しかし、この『萬寶全書』諸夷門の粉本に關する限り、この首都圖書館藏『格致叢書』本『羸蟲錄』で能事畢おわるとするわけにはゆかない。先述のように、ほとんどの『萬寶全書』諸夷門の卷頭には『羸蟲錄序』なる重要な一文が冠せられているのであるが、この序文は首都圖書館本のそれとはまったく異なっているからである。⁽¹⁴⁾諸夷門の本文や圖像とは一致する箇所もあるが、序文が別物である以上、この版本をもって諸夷門の粉本とすることはできないのである。

そうした折も折、筆者は『羸蟲錄』單行本の具体的内容を富山大學の藤本幸夫論文によって教示されたのである。⁽¹⁵⁾『格致叢書』は既刊書を再編集したものであるからオリジナルの存在が前提になっているが、従来單行本『羸蟲錄』についてはまったくと言ってよいほど顧慮されてこなかった。所藏先は中國ではなく、多數の善本の架藏で知られるわが國の成篁堂文庫（徳富蘇峰舊藏）である。實は『成篁堂善本書目』（昭和七年刊）にすでに單行本『羸蟲錄』の簡明な解題と書影が掲載されており、また注（11）で述べたようにその書目を見たらしい王重民氏によって触れられているのであるが（王氏は「未見」と断っている）、該書を書誌的觀點から精査し、その存在を廣く世に知らしめたのは藤本氏の功績である。筆者も先日駿河臺のお茶の水圖書館（私立）で實見したが、序文は『萬寶全書』のものとはほぼ完全に一致する（この序文の内容については次章で検討する）。成篁堂本は『羸蟲錄』嘉靖二九年の靜徳堂刊本で、⁽¹⁶⁾萬曆二十年

代以降、爆發的に世間に廣まった『萬寶全書』より先行するからソースとして時間的には不自然ではない。

ただ、『萬寶全書』とこの『羸蟲錄』の關係は複雑かつ微妙である。『萬寶全書』といっても一通りではないし、その本文や圖像のすべてに亘って成篁堂本と完全に一致するかというと、實はそのように斷定できないところに『萬寶全書』のソース探しの難しさがある。

それ以前に、現存が確認しうるこの二本の『羸蟲錄』相互間においても、序文以外に異同が認められる。圖像や説明文は大體一致するが、収載している國の数が違う。嘉靖二九年刊の成篁堂本は約百七十國に及んでいるが、格致叢書本は三卷に分かたれ（成篁堂本は不分卷）、各卷はきっちり四十國、合計百二十國と成篁堂本より少ない。このような整合的な構成からしても、格致叢書本は成篁堂本を再編して成ったと推測しうる。ただ、兩者の關係がそのように直線的かどうかについてはなお斷定を保留せねばならない。たとえば、格致叢書本にあって成篁堂本にない國も認められるのである。一般に著述というものは冒頭に何を置くか、何から始めるかに腐心するものであるが（いわゆる「託始の義」）、成篁堂本が「高麗國」から始められているのに對して、格致叢書本は成篁堂本にはない「君子國」なる奇妙な國が卷頭を飾っているのである。兩本の最初の部分だけ並べてみよう。上が成篁堂本、その下が格致叢書本、數字は筆者が便宜上打ったもの。参考までに、三列目に『三才圖會』（萬曆三五年序刊）も並べておいた。『三才圖會』所載のものは格致叢書本と酷似しており「君子國」も含まれているが（後置）、見られるように國の配列がまったく異なっている。ただ、『三才圖會』も考證の戦列に加えるとなると、三つ巴、四つ巴になって話が一層ややこしくなるので、本稿では深く立ち入らないことにしたい。

(成)

1、高麗國

(格)

1、君子國

(三)

1、高麗國

君子國



圖2 格致叢書（首都圖書館藏）本『蘇非本録』
「君子國」

- | | | |
|--------|--------|-------|
| 2、扶桑國 | 2、高麗國 | 2、女眞國 |
| 3、日本國 | 3、扶桑國 | 3、暹羅國 |
| 4、大琉球國 | 4、日本國 | 4、匈奴 |
| 5、小琉球國 | 5、大琉球國 | 5、占城國 |
| 6、女眞國 | 6、小琉球國 | 6、盤瓠 |
| 7、進羅國 | 7、女眞國 | 7、交趾國 |
| 8、匈奴 | 8、暹羅國 | 8、老撾國 |

因みに「君子國」の説明を全文引いておく。圖はというと、以下の説明文の通り、二頭の虎が一人の衣冠をまとった

温厚な人物の左右を護衛している、というものである(圖2)。どの國を念頭に置いているのか、まるで分からない。

君子國は、奢比の北に在り。その人は衣冠帶劍して獸を食らう。一大虎有り、常にその傍らに在り。その人、讓るを好んで争わず。故に虎豹をして亦た廉讓を知らしむ。

このように見てくると、『羸蟲錄』といっても當時何種類ものバリエーションが刊行されていた状況が浮かび上がってくる。『萬寶全書』の中に「京本羸蟲錄」とか「北京校正羸蟲錄」といった表題を掲げている版本が存在することがその傍證になるし、格致叢書本の莊汝敬の序文中にも「羸蟲の一書、その傳已に久しく、きけつ剗(出版)する者紛々然として差訛舛誤多し…この集大いに諸刻を蒐めて嚴に校正を爲す」という文言が見えている。

そもそも格致叢書自体にも異本がないのだろうか。『新刻山海經圖』は元來格致叢書に収められていたと言われるが、筆者の見た格致叢書(内閣文庫藏)『新刻山海經』には圖がない。『萬寶全書』上段「山海異物」のソースとして、『新刻山海經圖』が有力視されている以上(前掲尾崎論文)、下段も格致叢書の異本を種本に仰いでいる可能性が高い。

3、羸蟲としての異民族—諸夷門の異民族觀その一

次に、諸夷門に現れた明人の外國(または異民族)觀を窺ってみたい。諸夷門の外國觀は即ち『羸蟲錄』のそれだと考えるのは少し早計である。諸夷門ではすでに編者の手が加えられているからである。先述のように、諸夷門は二段組み—即ち二部構成になっている。上段は「山海異物」で下段は例の外國誌であった。もとより『羸蟲錄』には上段の記事はない⁽¹⁷⁾。上段は神話や傳説上の神怪に始まって禽獸・魚類におよび、卷を追うにつれていよいよ奇となり珍となる(版本によっては下段の夷狄の土産を上段に記すものもある)。つまりはどういうことであるのか。ここでは異民族と妖

怪・奇獸とが同居していて、まるで紙上の博物館のようなのである（動物園とまでは言わないが）。外國人は見物する側（つまり中國人）の好奇の目に晒されているだけでなく、外國人を同じ人間として見る視點はここにはない。中華の人々は人間としてこちら側に居て、異民族はあちら側に禽獸と一緒に「陳列」されているからである。このような紙面構成は、實は『羸蟲錄』の異民族觀と對應している。決して便宜的に兩者を同居させたわけではないのである。以下に検討するように、ここでは異民族は「羸蟲」（毛も何もない裸の動物）としてあからさまに蔑視されている。

『萬寶全書』に引かれている『羸蟲錄』の序文を見てみよう。先述のようにこの序文は格致叢書本にはない。版本によって若干異同はあるが、この序文のソースは間違いなく成篁堂本である。本書の詳しい書誌については前掲藤本論文を参照されたいが、本書が「（新編）京本羸蟲錄」と銘打たれている點にも留意したい（第一冊首行など）。「京本」というと『萬寶全書』と同じ系統になってくるからである。左の引用は、文章が最も近い『妙錦萬寶全書』（萬曆四十年刊、吳氏目錄13、圖1參照）による。これが序の全文である。この版本の序文が最も成篁堂本に近いが、それでも採録されているのは全體の約半分であり、以下の引用の後半にも成篁堂本に比して若干語句を省いているところがある。

鱗蟲三百六十にして、龍これが長と爲す。羽蟲三百六十にして、鳳これが長と爲す。毛蟲三百六十にして、麟これが長と爲す。介蟲三百六十にして、龜これが長と爲す。羸蟲三百六十にして、人これが長と爲す。何となれば則ち人を以て羸蟲の長と爲すや。蓋し人と物とは皆天地の生ずる所なるも、羸蟲なる者は四方化外の夷、是れなれば也。書に曰く、生まれて中國に居る、故に天地の正氣を得る者は人と爲る。生まれて化外に居り、天地の正氣を得ざる者は禽と爲り獸と爲る、故に羸蟲と曰う。孔子曰く、夷狄を治むるは禽獸を治むるが如し、と。その説よ自る有り。原もとより倫理綱常なし。戰鬪を尙び生を輕んじ死を樂しむは虎狼の性也。貨利を貪り淫僻を好むは麀塵（成篁堂本は「麀塵」）の行也。故に人の性情とは實に相遼はるかなり。

この一文は古典の引用から成り立っているが、それと明示していない前半も実は『大戴禮記』や『孔子家語』を踏まえつつ、巧みに中身をすり替えている。ここでは『大戴禮記』から引いてみよう。

羽の蟲三百六十有りて、鳳これが長と爲す。毛の蟲三百六十有りて、麒麟これが長と爲す。甲の蟲三百六十有りて、神龜これが長と爲す。鱗の蟲三百六十有りて、蛟龍これが長と爲す。倮蟲三百六十、聖人これが長と爲す。

（『大戴禮記』卷十三、易本命）

本稿は中國における華夷觀念の思想的變化を述べる場ではないので、ここでは兩者を無媒介に比較するだけに留めておかざるを得ない。兩文の華夷觀には明らかな相違が認められる。というより、そもそも上引の『大戴禮記』の一文には華夷觀など存在しない。ここに登場するのは人と禽獸だけであって異民族は姿が見えないのである。ここでは、三百六十種の倮（倮裸、倮蟲）蟲、すなわち人間が禽獸と同じ「蟲」として同列に並べられ、他の「蟲」の「長」の延長線上に「聖人」が「倮蟲」の「長」として立てられているに過ぎない。その「三百六十」の「倮蟲」の中には當然「夷狄」としての異民族も含まれているはずであるが、文章の表面には出て来ておらず、たとえ作者の意識の中でその三百六十種が序列化されていたとしても、その中に含まれているはずの「夷狄」が「人」のカテゴリーの内に入っているのは否定のしようがない。

一方『羸蟲錄』はどうか。ここでは、原典になかった華夷觀念が持ち込まれている。原典の「倮蟲三百六十、聖人これが長と爲す」と、『羸蟲錄』の「羸蟲三百六十にして、人これが長と爲す」とを讀み比べてみよう。一見「聖人」の代わりに「人」が入っただけのように見える。しかしここで言う「羸蟲」とは何か、「人」とは何か、それが問題である。「羸蟲」とは「四方化外の夷」であり、「人」とは「生まれて中國に居る」存在、則ち中國人に他ならない。外國誌を「羸蟲錄」と命名した所以である。そしてこの「天地の正氣を得」た中國人だけが人間であって、それ故に「天地の

正氣を得ざる」人、いや人間にはあらざる、毛も羽もない裸の蟲¹⁸動物としての夷狄の上に君臨しうる、というのである。ここでは異民族は人間ではなく、動物と同列に並べられている。外國（人）誌が奇獸・珍獸誌と紙面を共有している理由がここにある。權威ある儒教の古典を踏まえつつ、巧みに中身をすり替えて換骨奪胎、まったく異なった文章に仕上げている手腕は見事と言ってやってもよい。

4、親疎の別―諸夷門の異民族観その二

前章では、『萬寶全書』諸夷門下段のソースである『羸蟲錄』の華夷観を窺ってみたが、本章では同じテーマを別の観点から考えてみたい。

まず、『羸蟲錄』というこの奇妙な外國誌の讀まれ方という問題がある。このテキストは明代、どの階層でどの程度讀まれたのか。本書は今日ではほとんど稀覯に屬しており、本書に言及する周邊の資料も見出しがたいから、この問いは難問と言わざるを得ない。我々としてはただ、胡文煥という當時の有力な刻書家が本書をその叢書中に收め、さらに「四民使用」を謳い文句に廣汎な讀者層を掘り起こそうとした『萬寶全書』に採録されたという事實から、當時相當人氣のあった書物だったのだろうと推測する他はない。少なからざる版本が出回っていた可能性についてもすでに言及した。本書が萬曆以後ほとんどその消息を絶ったのは、『萬寶全書』が世に盛行したからであろう。

それからもうひとつ、國家の命を帯びて琉球に使いた、明代の冊封使の著述中に本書が見えるという事實を指摘しておきたい。冊封使は歸國後、琉球見聞記ないし出張記録を書き著すならいがあって、十二種の「使琉球錄」が現存している。彼らは渡航の前に琉球事情を知っておく必要がある、事前に種々の外國誌を學習し、歸國してから文献と實見

とのズレをその「使琉球録」に書き記した。たとえば、最初の「使琉球録」である陳侃のもの（その名も『使琉球録』という）を見てみよう。彼は嘉靖十二年（1533）五月三日に福建省の福州をあとにし、十月二日、無事福州に歸着している。そして翌年、『使琉球録』を書き上げた。¹⁹本書には―そしてこの體例はこれ以後の「使琉球録」に踏襲されてゆくのだが―「群書質異」という章が設けられていて、そこに『羸蟲錄』も掲げられている。とりあえずそのリストを並べてみよう。²⁰

- 一、大明一統志
- 二、羸蟲錄
- 三、星槎勝覽
- 四、集事淵海
- 五、杜氏通典
- 六、使職要務
- 七、大明會典

このリストによると、わが『羸蟲錄』は、『大明一統志』や『大明會典』などの權威ある文献と同列に並べられていて、國家からもそれなりの評價が與えられていたことを推測せしめる（『羸蟲錄』は後に行くほど荒唐無稽になるが、前半は情報の新舊を問わなければ比較的着實である）。この『使琉球録』（嘉靖刊本）に引く『羸蟲錄』では、琉球は次のように記述されている。

琉球は建安の東に當たり、水行すること五百里なり。土には山峒多く、峒には小王有り、各々部隊を爲して相救援せず。國朝への進貢時ならず。王子及び陪臣の子、皆太學に入り讀書す。禮待甚だ厚し。

この記述は、ちょっとした文字の異同はあるものの、格致叢書本や成篁堂本でもほとんど変わらない。そして『萬寶全書』の諸本も上記を踏襲している。それにしても、「山峒」という概念がよく分からない。陳侃はこの箇所コメントし、「琉球は固より山多きも崆峒は則ち少なし」と批判的な見解を述べているが、「峒」とは洞窟のことであろうか。いずれにしても、この琉球観は當時の現實の琉球を寫し取っているとは思えず、『隋書』琉球國伝の段階から何ほども進歩していない。

さて、ここで本章の冒頭で述べた問題に戻らねばならない。『羸蟲錄』の異民族観の續きである。前章で異民族の禽獸視を指摘したが、もう少し細かく見てゆく必要がある。というのも、異民族がすべて一括りで蔑視されているわけではないからである。『萬寶全書』では省かれているが、成篁堂本の序文では終わり近くで、さんざん夷狄を蔑んだ後、朝鮮だけは名指しで次のように評價する箇所がある。なお、明代ではすでに高麗から朝鮮王朝に替わっていたのに、ここでは依然として「高麗」とされていて、この呼称もそのまま『萬寶全書』に受け継がれる。⁽²⁴⁾『萬寶全書』では、國都は高麗の都・開城のままになっている。情報がここでも一時代古いのである。

…獨り高麗のみ箕子の遺風に名あり、禮樂の教え存す。

當然のことながら、成篁堂本『羸蟲錄』は「高麗國」を卷頭に掲げる。そしてその説明も、この序文のパラフレーズになっている。外國誌の中でも高麗の説明が最も長文であるが、ここでは初めの數行を引いておく。ただし、校訂が杜撰で、誤字だけでなく、意味が通らない箇所もある。それらのほとんどは格致叢書本や各種の『萬寶全書』に踏襲されるが、同じく『羸蟲錄』に依ったと思われる『三才圖會』などで補正しておいた。

古の名は鮮卑、周の名は朝鮮。武王 箕子をその國に封ず。中國の禮樂詩書・醫藥卜筮 皆此に流る。衙門官制は悉く「中國」を體し、國人の「衣」冠は中國各朝の制度に隨う。裕「俗」は儒を尙び、仁柔にして殺刑を惡み、殘



圖3 格致叢書（首都圖書館藏）本『羸蟲錄』「高麗國」

酷無くしてこれを生かす。族人皆君と稱す。化外四夷の國、獨り高麗を最と爲す。但だ禮貌は中國と差有り。このように『羸蟲錄』の夷狄評價の基準は、いかに「禮樂」を核とする中國文化に接近しているか、にあった。中國人からすれば、ひたむきに中國を敬慕する朝鮮は中國文化の優等生なのである。

高麗の圖像もこの説明文に對應して、衣冠をまとい胸前で扇子を廣げて正面を向く堂々たる士人である（圖1の『妙



圖4 『文林聚寶』諸夷門（蓬左文庫本）

錦萬寶全書』、『萬用正宗不求人』ほか)。ただし、この圖像は『羸蟲錄』のそれとは少し異なっているのが不可解である。『羸蟲錄』のものは兩本とも衣冠は備わっているものの、**圖3**のように體は向かってやや左に、顔はやや右に向き、全體として『萬寶全書』の重厚な正面像に比べて若干軽い印象は否めない(『三才圖會』も同)。ただ、『萬寶全書』の間でも微細な點では異同がなくはない。たとえば、杏雨書屋本(崇禎刊本、吳氏目錄28)では、體全體が左を向いているかなり貧弱な人物像になっているし、『五車萬寶全書』(萬曆四二年、吳氏目錄16)などでは扇子が閉じられている。

なお、順列の問題に戻って言えば、『羸蟲錄』に依據する限り高麗を卷頭に置くべきところであるが、版本によっては稀に高麗から始まらないイレギュラーなものもある。『羸蟲錄』の格致叢書本が「君子國」から始まっていることについては先述したが、たとえば『諸書博覽』(萬曆三十二年刊本、吳氏目錄8)などは「交趾國」がトップの座を占めているし、『文林聚寶』(萬曆二八年刊本、吳氏目錄5)では「西番國」が卷頭に來ていて「高麗國」は三番目である(圖4)。しかし、これらの版本が高麗を後置した理由がよく分からない。『羸蟲錄』に依據しながら序文を無視したのか、あるいは『羸蟲錄』の他の版本に従ったのか、または何か別の外國誌を根據にしたのか、それとも單に編者の気まぐれによるのか。

いくつか例外はあるにしても、『羸蟲錄』や『萬寶全書』は原則的に中國との親・疎、それに遠・近によって諸國を配列しているようである。次に、わが國の扱われ方を見てみたい。

5、日本觀——諸夷門の異民族觀その三

日本の順列は版本によって一様ではないが、おおむね『羸蟲錄』に依據して卷頭の近くに置かれている。⁽²²⁾ 本邦の場合



圖5 『妙錦萬寶全書』諸夷門（汲古書院集成本）

は、前章で述べたように「親」よりも「近」の原則に基づくのであろう。『萬寶全書』の諸本において日本がどのように扱われているかについては、すでに田中健夫氏によって詳細に論じられており、筆者の知見は氏の諸論考の範囲内に留まっているのであるが、ただ視点が少し異なっている面もあるので敢えて屋上に屋を架すことにする。

『萬寶全書』における日本の記述は、管見の及んだ限りで言えば、文章は二種類、圖像も二種類ある。より一般的な文章のパターンは次のようなものであり、「高麗國」に比べていかにも簡略である。

A. 日本國。即ち倭國なり。新羅國の東南の大海中に山島に依りて居す。九百餘里なり。專一に海に沿いて寇を爲して生活す。中國 呼びて倭寇と爲す。

（『妙錦萬寶全書』ほか）

この説明に付せられた日本人圖像は、上半身が裸、足元が裸足で、抜き身の日本刀を肩に擔いでいるという、「野蠻人」の見本のような繪である（A、圖5）。周知のように「衣冠」は、中國の禮文化においては華と夷とを分ける重要な標識であった。

いまひとつのパターンはそれほど例は多くはないが、比較的長文で、内容も古い日本人像を引き摺ってはいるもの、前者とは異なって多方面から實情に迫ろうとする姿勢は窺われ、「倭寇」の二文字も出てこない。宮内廳本『五車萬寶全書』所載のものを全文書き下しておこう。

B. 日本國。即ち倭奴の國なり。その地は西南より海に至り、東北隅は隔つに大山を以てす。國王は王を以て姓と爲し、歷世不易にして、文武僚吏はみな世官なり。その地は五畿七道有り、州を以て郡を統べ、附孺する國凡そ百餘國。本朝の洪武四年、國王良懷 使臣僧祖を遣わ



圖6 『五車萬寶全書』諸夷門（汲古書院集成本第8卷）

し朝貢せしむ。永樂より以來、その國王の嗣立はみな本朝の冊封を受く。その國は閩浙を去ること甚だ邇^{ちか}く、その朝貢は浙の寧波由り以て京師に達す。風俗は、男子は面に黥^{いれずみ}し身に文^{いれずみ}し、衣は儒に在り、幘幅結束し、相連なりて縫綴を施さず。女人の衣は單被の如く、その中を穿ちて以て頭を貫く。みな披髮跣足なり。盜無く訟少なし。同姓を娶らず。飲食には籩豆を用い、以て蹲跪して恭敬を爲す。初葬には酒のまず、屍に就きて歌舞す。兵は矛盾・本弓・竹矢を用い、骨を以て鏃^{やぶ}と爲す。

これに對應する圖像は、半裸抜刀の野蠻人とは打って變わった、胸前で拱手する着衣の僧形である（B、圖6）。あるいは文中の「使臣僧祖」を描いているのかもしれない。

この二種類の日本（人）観は、『萬寶全書』の刊行年からして、A（A）↓B（B）（またはその逆）へと變化していったと、単純には言えないようである。これらは並行して世に廣まっていたらしい。ただ、先述したようにA—Aの日本（人）像を登載する『萬寶全書』の数が多く、こちらの方がより廣く流布していたと思われる。

このAB二種の日本（人）観の直接のソースは『羸蟲錄』のはずであるが、ここで問題が生じる。成實堂本、格致叢書本ともに同文・同圖で、いずれもA—Bという組み合わせになっているのである（ただし、上引『萬寶全書』の僧形がやや右向きなのに對してこちらは左向き）。考えてみると、そもそもこの『羸蟲錄』の日本（人）観は矛盾している

といえ矛盾している。文章では倭寇を言い、繪では僧形を描くという一種のねじれ現象が見られるからである。特に半裸拔刀の日本人像がいつどこから現れたのか、まだ調べがっていない。たとえば『妙錦萬寶全書』などは、諸夷門巻頭に「京本羸蟲錄」という出典を掲げ(圖1)、A—Aという日本(人)像を収載しており、何度も言うように現存する二本の『羸蟲錄』の他に、當時異本が相當出回っていたはずである。⁽²⁶⁾

6、小結

以上、『萬寶全書』諸夷門を通して、明人の外國觀の一端を探ってみた。この資料による限り、ほぼ以下のように言ううるのではないだろうか。

- 1、「諸夷」と言い、「一國」と銘打ちながら、關心の在りどころは結局のところ「人」(衣装、風體)である。
- 2、「人」としての中國人と「羸蟲」としての外國人が峻別され、華と夷の間の越えがたい斷層があらわに提示されている。
- 3、異民族と神怪・奇獸が同列視されていて、ここでは外國人は交流より好奇心の對象になっている。
- 4、傳聞が固定されて肥大し、實證・檢證の缺如によって古い情報がそのまま罷り通っている。^{まか}
- 5、現實と空想が混同されている。
- 6、異民族の親・疎によって序列化されている。
- 7、まったく異質な二種の日本(人)像が同時代に併存している。

注

- (1) 國立政治大學歷史系刊、二〇〇一年。
- (2) シンポジウム全體のテーマは「日用類書『萬寶全書』を巡る諸問題」。當日の發表者と演題は以下の通り。①宮崎順子「明代の『萬寶全書』と風水思想」②吳蕙芳「『萬寶全書』に現われた清末・民國初の社會變化」③三浦國雄「沖繩に傳來した『萬寶全書』」④金文京「『事林廣記』と『萬寶全書』」④小川陽一「日用類書の編纂方法——『五車萬寶全書』を中心に——」。
- (3) R. J. スミス著、加藤千惠譯「通書の世界——中國人の日選び——」、凱風社、一九九八年、三浦解説参照。
- (4) 『文藝論叢』六二、二〇〇四年。
- (5) 吳氏目錄20に六卷本が擧げられているが、これは完本かどうか未詳。
- (6) 『三臺萬用正宗』四三卷。萬曆一十七年刊。吳氏目錄4、汲古書院集成本、3、4、5卷。また、注7も見よ。
- (7) 吳氏目錄1。ただし、ここでは完本が落ちてゐる。武田科學振興財團杏雨書屋藏「新鐫天下備覽文林類記萬書萃寶」四三卷には缺卷がない。
- (8) 沖繩傳來本の門名は「四夷考要」。この門名はほかに類がない。また、ここには神怪がなく「四夷」のみである。
- (9) 吳氏目錄を見よ。そこには門名まで記載されている。その目錄20の版本には諸夷門を缺くが、これは完本ではなからう。なお、諸夷門の源流は、南宋に成った『事林廣記』方國類であろう。ただし、ここには高麗も日本も琉球も記載がない。
- (10) 『汲古』四五、平成十六年。
- (11) 新譯注版『中山傳信錄』、榕樹書林、一九九九年、二〇頁。王重民氏は、『中國善本書提要』子部類書類「萬用正宗不求人全編三十五卷」の解題文中で次のように述べている。「余又檢卷十三《諸夷》一類、全採《異域圖志》。……又日本成篁堂藏《羸蟲錄》一卷、以爲《異域圖志》之異名。該書在元、明間有數翻本、然《圖志》與《羸蟲錄》余均未見」。以上の引用は一九八三年、上海古籍出版社版に拠るが、本書の前身は、一九七二年、台湾文海出版社刊『美國國會圖書館藏中國善本書錄』である。
- (12) 王寶平「明代の刻書家胡文煥に關する考察」、『汲古』三六、平成十一年、参照。
- (13) 萬曆二一年序刊『新刻羸蟲錄』一函三冊、學苑出版社、二〇〇一年。小論の圖版2、3はここから取った。
- (14) 首都圖書館本には、胡文煥の序（萬曆二一年）と友人莊汝敬の序が付されている。この莊汝敬は格致叢書所收のほかの書物にもしばしば序文を寄せている（注12所引王論文参照）。
- (15) 藤本幸夫「陳侃撰『使琉球錄』解題」、夫馬進編『増訂 使琉球錄解題及び研究』、榕樹書林、一九九九年。なお、本書の初版

は一九九八年、京都大學東洋史研究室から刊行されたが、この段階では藤本論文には「『羸蟲錄』は」先人も指摘される如く未詳」と書かれている。

- (16) この成實堂本には珍藏者徳富蘇峰の以下のような「自記」が記されている。「是書係于曲直瀬養安院舊儲蓋浮田秀家壬申之役齎還戰利品之一也」。これによれば本書は、一旦は朝鮮に伝えられていたことになる。本書は、後述するように數ある「夷狄」の中でも朝鮮（本文では「高麗」）を別格視していたから、いたく朝鮮人のプライドをくすぐったことであろう。

- (17) 格致叢書本の胡文煥の序によれば、彼が見た「舊本」の多くは、異民族と禽獸とが混在していたという。そこで禽獸は「山海經」へ（多分格致叢書本『新刻山海經』と『新刻山海經圖』、「羸蟲」はここへ（つまり格致叢書本『新刻羸蟲錄』）へ振り分けたと書いている。

- (18) 右記胡文煥の序では「聖人」が復活している。彼は成實堂本序のようなあからさまな差別観は表に出さず、次のようなことを述べている。「海外諸國」に、または「羸蟲」に「長」たる「中國人」は、その自覺を持って「毛羽鱗介」にも劣るようなこととはせず、「人」に「長」たる「聖人」を指さないと、單なる「羸蟲」、單なる「毛羽鱗介」になってしまう、と。

- (19) 前掲藤本論文、原田禹雄譯注『使琉球錄』、榕樹社、一九九五年、参照。

- (20) これらの文獻については、前掲藤本論文、原田禹雄『明代琉球資料集成』、榕樹書林、二〇〇四年、を見よ。

- (21) 田中健夫『東アジア通交圈と國際認識』、吉川弘文館、平成九年、四〇頁以下参照。

- (22) 『三臺萬用正宗』（萬曆二七年、吳氏目錄4）などでは、日本は遙か後方に置かれている。『萬寶事山』（東北大學圖書館藏）ではなんと筆頭に置かれ、**圖4**に引いた『文林聚寶』では、蓬左文庫本を見る限り「日本國」そのものが掲載されていないが、これらは極端な例と言わざるを得ない。

- (23) 田中健夫前掲書、第二章「相互認識と情報」、第七章「倭寇圖雜考―明代中國人の日本人像―」、第八章「倭寇圖追考―清代中國人の日本人像―」、第九章「倭寇圖補考―仁井田陞氏舊藏書について―」等の諸論考。

- (24) 田中健夫前掲書二五六頁に、ほぼ同文の『博覽全書』（吳氏目錄31）の翻刻がある。『五車萬寶全書』（吳氏目錄16）もほぼ同文。

- (25) ほぼ同文を載せる『萬書萃寶』（吳氏目錄1）は、このあと他本にはない文章が二行ほど続く。

- (26) たとえば「女人國」の圖は、兩『羸蟲錄』、『三才圖會』と各種『萬寶全書』とでは全く異なっている。前者が三人の裸婦と井戸を覗き込む三人の着衣の婦人（うち二人は乳房が見えている）から構成されているのに對して（**圖7**）、後者は井戸の側に



圖7 格致叢書（首都圖書館藏）本『羸蟲錄』「女人國」

二人の着衣・着帽の婦人が立っているというものである（圖8）。



圖8 『妙錦萬寶全書』諸夷門「女人國」（汲古書院集成本）